

西洋建築史第10回

バロック2ーイタリアとフランス

中島 智章

序.バロック建築の劇場性

●トスカーナ大公のフィレンツェ

共和制→Cosimo I(1519-74)=Lorenzo il magnificoコジモ1世 豪華王ロレンツォの曾孫:フィレンツェ公(1537-74)→トスカーナ大公(1569-74)
Francesco I(1541-87)の親ハプスブルク政策とFerdinando I(1549-1609)の親仏政策

●ルネサンスの野外祝典とオペラの誕生

1589年:トスカーナ大公Ferdinando Iフィレンツェ1世の婚礼→『ペレグリーナ』のインテルメディオ(パラッツォ・ウフィツィにて)
「カメラータ」の活動:ヤコポ・ペーリ、ジュリオ・カッチーニ、ヴィンチェンツォ・ガリレイ→古代ギリシア悲劇の復興
1600年:フランス国王Henri IVアンリ4世とMaria de Mediciマリア・デ・メディチの婚礼→ペーリ作曲『エウリディーチェ』(パラッツォ・ピッティ)
1608年:マントヴァのクラウディオ・モンテヴェルディ(元ヴェネツィア聖マルコ司教座聖堂楽長)作曲『オルフェーオ』

●常設劇場建築の発展

テアトロ・オリンピコ、テアトロ・ファルネーゼ(パルマ)、サン・カッシアーノ劇場(ヴェネツィア)、テュイルリー宮殿附属劇場

●人文主義とルネサンス宮殿→パラッツォ・スキファノイアに黄道12宮の間(フェッラーラ=エステ家の本拠地)

→上段:凱旋車の乗った神々、中段:黄道12宮とそのマーク、下段:季節の余暇と仕事

●フィレンツェのパラッツォ・ピッティの七惑星の広間群(1641-47)

Pietro da CORTONAによるヴェーネレの間、マルテの間、ジョーヴェの間+没後、アポッロの間、サトゥルノの間も完成
ヴェーネレの間、アポッロの間、マルテの間、ジョーヴェの間、サトゥルノの間の順に配置←天動説の宇宙観による配置
スタッコ装飾と騙し絵(トロンプ・ルイユ)とフレスコ画が渾然一体となった空間

●OVIDIVS: METAMORPHOSES+Cesare RIPA: Iconologia, 1593→神話のネタ本と抽象概念の擬人化マニュアル オウィディウス・ナーソー、プーブリウス:『変身物語』(全2冊)、中村善也訳、岩波書店、東京、(上)1981年、(下)1984年

1.フランス宮廷のスペクタクル

●1660年8月26日:Louis XIVマリー・テレーズとMarie-Thérèseのバリ入城式→市内各所に仮設凱旋門など=国王夫妻を讃える寓意物 サンタントワヌ門の仮設凱旋門(太陽と月)

→サン・ジェルヴェの泉の仮設凱旋門(太陽神アポロンとミューズ女神たち+本物の楽師たち)

→ノートル・ダム橋の歴代国王テルメ柱→マルシェ・ヌフ→王太子広場

●宰相Jules MAZARINジュール・マザランによるオペラの導入の試み

1645年『偽りの狂女(La Finta Pazza)』、ストロツィ台本、サクラティ作曲

1647年『オルフェーオ(Orfeo)』→書下ろし、ルイジ・ロッシ作曲、トレッリ演出、ブティ神父脚本、パレ・カルディナルにて

●イタリア語のせりふを全編歌うオペラの形式はフランス人に受容られず

→しかし、華麗な舞台装置と機械仕掛はうける

1650年『アンドロメド(Andromède, Tragédie, Représentée avec les machines sur le théâtre royal de Bourbon)』

→ピエール・コルネイユによる仏語作品、出版されたときに機械仕掛を伴う悲劇であることを明記

1660年『金羊毛(La Toison d'or)』→コルネイユ台本、Louis XIVマリー・テレーズとMarie-Thérèseの結婚(1660)を祝う

●オペラ導入の試み再び

→1662年『恋するエルコレ(Ercole amante)』、カヴァッリ作曲、ヴィガラーニ演出、テュイルリー宮殿→これも失敗

→MAZARIN枢機卿没後(1661)、宮廷バレの時代→バンスラード、モリエール、ジャン・バティスト・リュリ...

●フランス語によるオペラの試み

→1671年『ポモーヌ(Pomone)』、カンベール作曲、ペラン台本→リュリによる乗っ取り

→レシタティーフ(レチタティーヴォ)とエール(アリア)の差は流動的、バレと合唱を用いたディヴェルティスマンの挿入
ex)アルセスト(1674)、アティス(1675)、ペルセ(1682)、ファエトン(1684)、アルミード(1686)、アシスとガラテ(1686)など

2.祝典の仮設建築から石造の恒久建築へ

●Louis LE VAU(1612-70)+Charles LE BRUN(1619-90)+André LE NOSTRE(1613-1700)

ヴォー＝ル＝ヴィコント(1657-61)→LE VAU設計の城館：楕円形広間と楕円形クーポラ(1656年4月2日設計案提出)

+LE BRUNの内装デザイン+天井画←イタリア・バロック美術(Pietro da CORTONA)

+LE NOSTRE設計の庭園→幾何学的なフランス式庭園

●LE VAU: 四国学院(コレージュ・デ・キヤトル・ナシオンcollège des quatre nations、1661年12月31日立地案進言、1662～67/68)

→中央のクーポラを頂いた部分から前方に湾曲している翼棟→珍しいイタリア風バロック建築

●クーポラ(ドーム)をいただいた大空間への指向←ローマ・バロック建築、舞台の上の建造物

湾曲する両翼←ローマのサン・ピエトロ大聖堂のBERNINIによる広場など、ローマ・バロックの特徴

ジャイアント・オーダー(大オーダー)←16世紀前半にMichelangeloが発明したが17世紀に普及

3.ローマ・バロックの否定とフランス・バロック建築の独自性

●ルーヴル宮殿東側ファサードをめぐる葛藤

国王付首席建築家LE VAUの設計

→財務総監、国王付建設局長官Jean-Baptiste COLBERTの不満

→François MANSARTなどのフランス人建築家たちと4人のイタリア人建築家たちによる設計競技

→BERNINI: ルーヴル宮殿東側ファサード計画案(第1-3案)→バロック的な第1案は拒否される

→第3案(直線主体、コリント式大オーダー、1階部分はルスティカ積仕上げ)を採用、着工(1665-)→急に中止

→LE VAU、LE BRUN、Claude PERRAULT(1613-88)からなる三人委員会による新案検討(1667)

東側ファサード列柱廊→列柱廊に鉄筋の使用(石材は剪断力に弱い): 医学、科学にも通じたPERRAULTのアイデアか

→直線主体のデザイン＝ローマ・バロックではなく、「フランス古典主義」だといわれるが?→×

→双子柱による列柱廊(バロック的要素): LE VAUの弟François LE VAUのアイデアか

●ローマ・バロック＝教会バロックの否定→独自のフランス・バロック＝王権バロックの誕生

4.王権バロックと都市を飾る記念建築

●パリの広場＝Henri IV治世の都市近代化→国王(ヴォージュ)広場(1605)、王太子広場(1607-15)、ボン・ヌフ(1598-1606)

①高密度な都市生活における息抜き場+②パリ市全域を対象とする商業地域+③宮廷の野外祝典のための場

●HARDOUIN-MANSART: ヴィクトワール広場、Louis XIV(ヴァンドーム)広場(1685-1720)→ファサードのみ規定

フランス・ロワイヤル
各都市の国王広場(place royale)→国王のイメージを全土の臣民に伝達

●パリの非武装化(市壁の撤去)と凱旋門

Nicolas-François BLONDEL(1618-86): サン・ドゥニ門(1671)→オーダーの代わりにオベリスク・デザインを採用

サン・マルタン門(1674)→オーダーなしの凱旋門モチーフ+第2次フランシュ＝コンテ征服を言祝ぐ浅浮雕

Claude PERRAULT(1613-88): サンタントワヌ門(未完)→双子柱を使用した壮麗なデザイン

パリ門(1685-92、リール)→市壁外側ファサード＝記念門のスタイル←→町側ファサード＝3階建ての門衛所の建造物

→目の前に見える世界を重視し、そこに表現の努力を集中するバロックの造形思想